

討論メモ

「中国『軍事強国への夢』」

令和 6年1月16日

森田晃司

1. 1月は、大平忠さんに、中国内のベストセラーと言われ、習主席にも影響力が大きいとも評される頭書「中国の夢」を取り上げ、解説いただきました。

著者は劉明福氏で、国防軍の上級大佐、現在は人民解放軍国防大学教授を務めている人物です。

「中華民族の偉大な復興の実現」を目指し、中華人民共和国建国百年の2049年までに米国と並ぶ強国となり、さらに21世紀中には、米国を凌駕して「世界ナンバーワンの国」になるという構想を述べています。

(詳細は専用ページに掲載された大平さん作成の資料をご参照ください)

(なほ、後日、大平さんより、1月19日付の産経新聞の柿の記事の紹介とコメントがありましたので、付記します)

記事内容

周政権は金融統制を強化のため、党内に「中央金融委員会」を創設し、金融分野のトップに、習近平の懐刀である何立峰が就任したとか。また、1月16日に習近平は、共産党中央党校で演説し「金融リスク、特に金融不安の連鎖の防止と解消に力を入れなければならない」と強調した。昨年9月には范一飛元人民銀副総裁が収賄罪で起訴され、金融機関や関東局の幹部の摘発も相次いでいる。

この記事は、2012年に再発行された「中国の夢」にある、経済のグローバル化の目標の一つ「金融」にもいよいよ党指導の監督が強化されたことを

物語っています。

また、2013年から取り組んだ腐敗撲滅が中国の社会ではいかに難しいかと言う事実も確かな

ようです。しかし、権力闘争のパターンとして、汚職摘発で倒すことが常套化されていることを考えると、本当にそうだったのか、これまた？で藪の中です。

2. 次いで、出席者九名による様々な角度からの意見交換を行い、下記のような意見が出されました。

・「中国の夢」は、自分の都合の良いように歴史を解釈し、利用しているのではないか、例えば米の南北戦争も奴隷解放の意義を伝えないし、また、中国は覇権を求めないというが、現実の動きと矛盾している。

さらに、西側諸国を批判するが、具体性もない。

・確かに、中国の主張は一方的な面もあるが、中国の立場を考えれば理解できる点もある。南北戦争は、台湾を念頭に、国家の統一の重要性を訴えたかったのだろうし、尖閣や南沙諸島への進出は、食料やエネルギーを自給できず、そのためのシーレーンを確保したい中国の特殊事情もある。

・「人類運命共同体」を目指すところがあるが、どんな共同体なのか？

・中華思想の中国中心の共同体ではないか。

・歴史学者の岡田英弘によれば、中国の歴史は中華思想によるもの。

・中国の王朝で儒教を採用したところはなく、多くは性悪説に基づく韓非子の教えを採用した。

・岡田英弘氏は、誰よりもたくさんの中国歴史書を読んだと自負しておられるが、司馬遷以来、中国の歴史書は虚偽ばかりと述べている。

・昔から、中国政治に腐敗はつきもの。習近平が腐敗退治をやっているが、権力闘争の一環で、腐敗・賄賂は現在も横行していると言われている。

・中国では汚職対策が重要だ。

・挨拶に行くのに、線香代を持参するのが普通だし、汚職はなくせないのではないか。

・中国が軍事強国を目指しているのは事実としても、軍人の戦意は低いともいわれる。中国に本当に戦う力はあるのだろうか。

・戦わずして勝つのが孫氏の兵法の極意。台湾統一も軍事でなく、ソフトパワーで実現を目指すのではないか。

・共産中国も、米国や日本と同様に金融資本に支配されていると言われる。政治軍事面では、米中対決を演出しているが、去年の中国の対米輸出は過去最高で、

経済の共存体制は変わっていない。

・金融資本は、1913年にFRBを創設して、米国の通貨発行権を握り、これが米
国を支配する源泉となっている。

・中国は、元による国通貨支配をねらっているのではないか。

・ウクライナ戦争後、米ドルによるが怪しくなっている。

・中国も金融資本も一枚岩ではないから、今後どんな展開があるのか、予測は難
しい。

以上